

討論 1

根本 敬 上智大学

3人の報告者のみなさま、有意義な報告をありがとうございました。通常はミャンマー（ビルマ）のなかの負の問題として認識されることの多いロヒンギャ問題です。すなわちミャンマーでは、いるのにいないとされている人たちのことです。換言すれば、「ロヒンギャ」としての名乗りと、それを認めずに「ベンガル人」という名づけを強要するビルマ政府および多数派国民、この両者の対立と言えます。

ただし、一応申しあげておきますと、現在のアウンサンスーチー国家顧問の政府は、「ベンガル人」という呼び方から「ラカインのムスリム・コミュニティ」という名前に変えています。しかし、いずれにしても「ロヒンギャ」という名乗りは認めていません。こういうなかで偏見と差別にさらされ、難民や移民となってミャンマーを脱出するわけですが、どの国も受け入れには熱心とは言えないという理解がこれまで一般的でした。したがって、「東南アジアのクルド」と言われることもありました。

■ バングラデシュでのムスリム差別の実態と脱出先2国での状況が明らかに

本日のこのパネルの意義を私なりにまとめますと、第一に、ミャンマーのムスリム全体が置かれている現状の紹介を通じて、ムスリムが仏教徒主流の社会において、いかなる問題と日々直面しているかが示され、ロヒンギャ問題の一要因であるミャンマーにおけるムスリム差別の実態が提示されました。これが一つ目の意義です。

第二に、そのロヒンギャの主な脱出先、避難先であるバングラデシュとマレーシアでの実態と各国での扱われ方や抱えている問題が具体的に示されました。これが二つ目の意義です。とくにバングラデシュとマレーシアとでかなりの違いが見られたところが、興味深いと言えましょう。

このような一連の3人のご報告の考察によって、ロヒンギャをミャンマー一国だけに限定せず、通地的かつ複合的に検討する視点が提示されたことは意義深いと言えます。

■ ミャンマー仏教徒の反ムスリム言説の歴史的背景

続いて、3人の報告者への私からのコメントと質問をさせていただきます。まず斎藤紋子先生の報告に関し、仏教徒の反ムスリム言説の歴史的背景が、今日は時間の関係で飛ばされていたと思いますので、私なりに付け加えさせてください。

ミャンマーの仏教徒が抱く反ムスリム感情・言説は、反インド人感情と結びついたものといえますが、それはイギリス植民地期にまで遡ります。とくに大きな反インド人暴動が、1930年、1938年、1939年、1940年にかけて起こっています。経済的な要因が、これまで主に指摘されてきました。それはもちろん重要ですが、1938年以降の反インド人暴動の特徴としては、仏教をビルマの核心とみなす「ビルマ・ナショナリズム」の台頭が指摘できます。そのなかで、とりわけ反ムスリム感情が強まるわけです。インド人を排斥し、とくに仏教と何の接点も有さないイスラームを排斥する。仏教を中心としたビルマ・ナショナリズムの一環としてそれを主張していくということです。

そして、1938年の反インド人暴動がもっとも犠牲者を多く出したのですが、そこではヒンドゥー教徒とムスリムの両方が殺されているなかで、犠牲者の数を数えるとムスリムのほうがヒンドゥー教徒を相当に上回っています。犠牲になったムスリムには、現在のバマ・ムスリムにあたる、当時「ザーバディ」と呼ばれていた人たちも多く含まれています。

また、1939年と1940年の反インド人暴動は、正確に言うとインド人コミュニティのなかでの暴動でして、ヒンドゥー教徒とムスリムがぶつかっています。しかし、当時の植民地政庁の文章を読みますと、ヒンドゥー教徒側にビルマ人の仏教徒が加勢しているという報告があります。これを植民地政庁が非常に心配しています。こういうところから見ても、反インド人暴動のなかでは、とくにムスリムが「敵」と認識されたということが言えます。

そしてまた、1930年代の終わりから1940年代の初めにかけて、ビルマ人の政治エリートが植民地議会を

中心とする立法府への本格的進出が許されると、彼らはインド人の移民規制を主張しはじめます。そのなかでは、反インド人要素に加えて、とりわけ反ムスリム要素が見られます。こうした史実があったことを齋藤先生の報告に付け加えさせていただきます。

■ バマー・ムスリムへの保守的イスラームの影響とマバタの実際の影響力は

齋藤先生への質問は二つあります。バマー・ムスリムについて、私も以前ザーバディに関心があって調査をしたことがあるのですが、このザーバディの流れを引くバマー・ムスリムのなかで、ここ10年から15年ほど、保守的なイスラームの影響が現れていると聞きます。たとえばワッハーブ派の影響が、とくに若い世代で入っていて、それを年長のバマー・ムスリムが心配して見ているという話を、バマー・ムスリムの方から聞きました。もしその実態をご存じであればお聞かせ願います。

もう一つは、ウルトラ愛国的な僧侶の集団「マバタ」、この実際の影響力はどの程度のものなのか、お聞かせいただければと思います。とくに僧侶に対する影響力、そして国民全般に対する影響力です。2015年の総選挙では大した影響力を行使できなかったわけですが、一方で、事実上ムスリムを規制することになった四つの法案の署名運動と、それを基に法案を成立させたという点では、マバタは大成功を収めています。このマバタの実際の影響力について教えてください。

■ ロヒンギャ問題が人権抑圧問題のみならず 国境の治安維持問題でもあることを示した意義

順番は入れ替わりますが、次に高田峰夫先生の発表へのコメントと質問をさせていただきます。バングラデシュから見たロヒンギャ問題という非常に新鮮な切り口でした。バングラデシュ地域研究者がロヒンギャ問題考察に参入されることを、少しおこがましい言い方ですが、歓迎したいと思います。

ご報告では、2016年10月の国境警備隊襲撃事件をミャンマーへの主権侵害として客観的に検討しています。そしてロヒンギャ問題が、その結果、これまでの少数派に対する政府や軍による人権抑圧としての側面だけではなく、国境の治安維持問題にその対象範囲が拡大したことを示してくださいました。ミャンマー国軍と政府の対応をその視点から説明し、さらには最後に、(詳しく触れたたくはないとおっしゃいましたが) 麻薬の問題、すなわち現地語でヤーバーと呼ばれる薬の問題を含む生々しい現実を直視し、こうした

諸問題を考える必要性を提示したことは、これまでにない解釈だと思います。

■ 親戚ネットワークを持たない ロヒンギャは難民キャンプにいるのか

そのうえで質問があります。ラカイン北部とバングラデシュ側を、比較的自由にロヒンギャが行き来をしているなかで、もともと15、16世紀からこの地域は移動が自由な状況にありましたから、これはその21世紀版と言えないこともないと思うのですが、親戚ネットワークを伝ってバングラデシュのほうに出てくる人たちがいるというご指摘について、その親戚ネットワークなるものを持たない人たちの状況はどうか、知りたいと思います。実はそういうネットワークを持たない人たちが難民キャンプに入っていて、メディアの目を引いているのではないかと考えます。そのあたりのことを教えてください。

また、高田先生が人権問題としてのロヒンギャ問題の重要性を決して否定なさらず、それはそれで大事であるということを何度も断っていましたけれども、敢えて、学術的なロヒンギャ研究というものはありませんとお考えかどうか、お尋ねしたいと思います。私はありえると思っていますが、ロヒンギャ問題を考察する際には、世界的に関心を持たれやすい人権問題としての側面を切り離して議論すべきなのかどうか、そのあたりのお考えを高田先生にお聞きしたいと思います。

■ 「内政不干涉」と「相互不干涉」をめぐる問題とマレーシアにおけるロヒンギャの職業

順番が最後になって失礼しましたが、つづいて篠崎香織先生へのコメントと質問です。マレーシアのロヒンギャ受け入れに関する姿勢の複合的な要素が示されたとても興味深い報告でした。

2015年の例の漂流の事件以降、インドネシアのスマトラのアチェで、たくさんのロヒンギャが保護されていますが、そこで保護されたロヒンギャが、インドネシアよりもマレーシアに行きたがるという状況がありました。これはおそらく経済的な要因が大きいと思いますが、一方で、今日の報告にあったように、マレーシア政府とマレーシアのムスリム・コミュニティ、そして華人コミュニティの好意的姿勢も無視できない要素だということが理解できました。そのうえで、今後のロヒンギャのマレーシア国民への受け入れに関しては、いわゆる少数派、華人系マレーシア国民から、もしかしたら反発もあるかもしれず、ロヒンギャの定住がマレーシアで一筋縄に進むようすにはないこと

が理解できました。

篠崎先生への質問としては、多数派のムスリム・コミュニティと少数派の非ムスリム・コミュニティとのあいだに「内政不干渉」があるご指摘なさいましたが、それは言葉本来の意味での内政不干渉なのでしょう。私は二つのコミュニティ間の「相互不干渉主義」であって「内政」不干渉ではないと理解しています。というのは、どちらのコミュニティも、マレーシアの内政には関与できるはずだからです。したがって、互いのコミュニティのあいだで「不干渉」ということなのではないでしょうか。もし私の理解不足でしたら、そのあたりの説明をお願いします。

二つ目として、マレーシアに住む12万人のロヒンギャの就いている主な職業は何なのでしょう。もし下層労働者が多いとすれば、もしかしたらマレーシア政府やマレーシアの多数派コミュニティから下層労働力として期待されているのではないかと考えられますが、このあたりの事実をご存じでしたら教えてくださいたいと思います。

■ マレーシアとミャンマーにおける

民族問題の噴出状況の違いは何に起因するのか

また、これはコメント的な質問となりますが、ミャンマーも建前上は多民族からなる連邦国家です。ですから、一つの連邦だけれども多民族が住む、しかし、一つの連邦国民であるというアイデンティティをあまりにも重視し、それをビルマ民族(バマー)中心で語ろうとする場面が多々あり、したがって、少数民族問題を誘発しやすい原因となっているわけです。

このように、土着のなかの一つの主要な民族が「我々が中心である」と言って、建前上は「諸民族の連邦である」と言っているのですが、その矛盾がミャンマーでは長期にわたって噴出しているといえます。マレーシアは、もう少し上手にこの多民族性を「マレーシア国民」という枠組みに含めているように私は受け止めるのですが、マレーシアとミャンマーのこの違いがどこから出てくるのか、その比較を進めると興味深いのではないかと思います。これは質問というよりも、私自身も取り組んでみたいという意味でのコメントです。